

(別紙様式2)

普及指導員調査研究報告書

所属名：周南農林事務所

担当者名：中野 良正

課題名	9 集落営農法人の経営安定 法人S「アスパラガス」安定生産技術確立
1	調査研究チームの構成 朝山哲也、品川貢、中野良正
2	課題の目的 法人Sでは経営複合化の柱として平成23年からアスパラガスの栽培に取り組まれており、早期に生産体制を整備し経営安定を図る必要がある。 そこで、労働時間及び収量の実態を把握するとともに、生産体制の問題点を明らかにし、体制整備の検討材料とする。
3	調査研究期間 平成24年1月～12月
4	調査研究の対象地域・場所 法人S、光市
5	調査研究方法の概要 (1) 耕種概要 ア 面積：12a イ 品種：ウェルカム ウ 定植日：平成23年5月1日、7日、20日 エ 定植本数：2,280本 (2) 労働時間調査 ア 調査項目 作業日、作業者名、作業内容、作業時間 (3) 収量調査 ア 調査項目 月別出荷量
6	結果の概要、成果（または中間報告） (1) 労働時間調査（表1） 法人Sのアスパラガスの10aあたりの労働時間は1,682時間であり、JAの指標に比べ1.5倍多かった。全体の労働時間に占める各作業の労働時間の割合は収穫調製が63%と最も多く、次いで茎葉の整理、親茎刈り取り等のハウス管理が18%と多かった。各作業の労働時間の割合は指標とほぼ同じ傾向であった。 各作業の労働時間の指標との対比では病虫害防除が5.9倍と最も多かった。指標対比1.5倍を上回る作業内容としては施肥2.0倍、収穫調製1.6倍、出荷2.8倍であった。病虫害防除については病虫害の発生状況に、出荷については出荷場までの距離に影響を受けるため安定的な労働時間の削減は難しいと考えられる。 全体的に労働時間が多くなった要因としては、本格的な栽培管理は1年目であり作業員の技術習得が不十分であった影響が考えられる。今後、従事時間に比例した習熟により、ある程度の時間短縮は期待できると思われる。ただし、収穫調製作業については全体の労働時間に占める割合が多く、今後収量の増加が見込まれるため、作業の見直しが必要になってくる可能性が考えられる。

表1 平成24年法人Sのアスパラガスの実績労働時間

作業名	法人S		JA指標		労働時間比 法人S/指標
	労働時間 (時間/10a)	割合 (%)	労働時間 (時間/10a)	割合 (%)	
ハウス管理	303	18	251	23	1.2
施肥	102	6	52	5	2.0
病虫害防除	62	4	11	1	5.9
灌水	21	1	30	3	0.7
除草	75	4	61	6	1.2
収穫調製	1056	63	653	59	1.6
出荷	62	4	22	2	2.8
その他	0	0	20	2	0.0
合計	1682		1100		1.5

(2) 収量調査 (図1)

法人Sのアスパラガスの10aあたりの農協共販出荷量の合計は1,059kgであり、JAの平均出荷反収1,285kgに比べ少なかった。月別では特に4、5月の出荷量が少なかったが、これはまだアスパラガスが2年株であり春芽のための貯蔵養分が十分確保されていなかった影響が考えられる。また、法人Sのハウスは標高約90mの中山間地にあり、瀬戸内沿岸を中心とした産地平均とは収量パターンが異なる可能性も考えられる。しかし、農協共販以外を含む全体の出荷反収は1,710kgであり、規格外も出荷できる販路を確保されている有利性が発揮されている。

今後、株の充実に伴う収量増加は想定されるが、灌水、立茎、摘心、病虫害防除等の基本管理の徹底による着実な収量確保が必要となる。

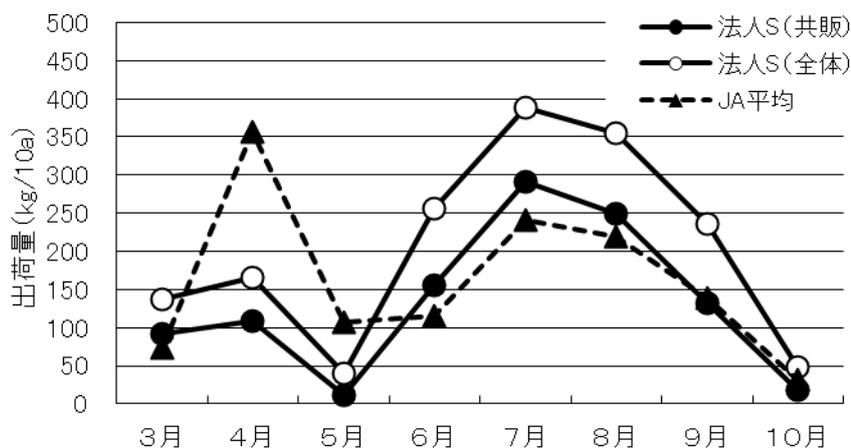


図1 平成24年 法人Sのアスパラガス月別出荷量

7 今後の問題点

収穫調製の作業改善と春芽の収量確保。

8 普及活動上の留意点

技術習得の途上であるため、作業上の問題点を把握しながら、灌水、立茎、摘心、病虫害防除等の基本管理を徹底していく必要がある。